挑　戦

五年　Ｒ・Ｎ

　時の流れは本当に早く、気がつけばもう二〇一五年です。恵泉で学年を重ねるごとに、一年の長さは短くなって行くように思います。皆さんの中には、二〇一四年の自分を振り返り、今年新たな目標を設定した人も多いでしょう。
友達に、貴方は本当に行動力があるねと言われる事があります。自分では、目の前のやりたい事をやっているだけでそういう風には思いません。ただ、一つだけ私がいつも意識していることで、皆さんに知っておいてほしい事があります。それは、この世の中の誰一人、長い一生が保証されている訳ではないという事です。

　私は、十歳のときに難病を発病し、恵泉に入ってからも、中学二年生のときに六ヶ月入院をしたことがあります。入院生活は、地獄でした。お風呂にも入れず、友達にも会えず、薬の副作用で徐々に膨らんでくる自分の顔とせっかく厳しい筋トレでつけた筋肉が落ちてくるのを見て、幾度も自分と他人を比較しては、何故若干十四歳の私が大切な半年間をこんな狭苦しいベッドの上で過さねばならないのか、何度も自分の境遇を恨みました。

　でもこの経験から私は、はっきりと、「日常が、障害なく続いて行く事は奇跡的な事で、いつも通りと思っていた明日が必ず来るとは限らない事を学びました。

　それから、私は周りの目が気にならなくなりました。「時間には限りがある。だから、誰かの人生を生きることで浪費すべきではない。」これは、スティーブジョブスが言った言葉で、私の大好きな言葉です。

　二〇一四年十一月、私は韓国で行われたリーダーシップサミットに参加しました。このサミットは、韓国のユネスコセンターで三泊三日の日程で開催され、日中韓の三カ国から一〇〇人ほどの高校生が集まり、ともに学び、三ヶ国の未来について話し合うというものです。選考はインターネットベースで行われ、本来は応募する前に両親に相談すべきですが、もし落ちたことを知られたら恥ずかしいというプライドが邪魔をし、結局誰にも知らせず勝手に受験したのです。合格通知が届いた後、参加費の全額は奨学金として頂けると聞いて、嬉しさのあまり携帯を持ったまま飛び上がり、父に承諾を得て、すぐに準備を始めました。

まず初めに私はこのプログラムに参加するにあたって目標を立てました。それは、リアルな声を聞く事です。最近、ニュースやネットで日中韓の緊迫した関係について聞く事が多く、お互いの国民イメージが悪くなっているように感じます。しかし、実際は私が中国の友達を持つ前に、中国に対してよくないイメージを持っていたのと同じように、他国の反日感情もある種の誤解から生み出されているかもしれないと思ったからです。そこで私はメディアからではなく、中国人や韓国人の声を直接聞きたいと思ったのです。

出発一週間前の事前説明会で、他の日本人と初めて顔を合わせました。名の知れた学校の、しかも帰国子女や両親のどちらかが外国人であるといった人たちが素敵なお母様と座っているのを見て、私は「これはまずい」と焦りました。私で大丈夫なのだろうかと心配になりましたが、選んで下さったのだから精一杯やろうと決意し、その足で図書館に向かい、日中韓関係に関する本を借りられるだけ借り、読み始めました。説明会では、「日中間の歴史についてどちらが悪い・正しいなどといった講義はない」と断言されましたが、会話の中で必要になるのではないかと考え、念のため勉強しておきました。

一日目、ルームメイトのヘジンとユリとは、すぐに打ち解け、その日の夜から早速深い話を始めました。将来の夢の話を契機に、話は止まらず、連日深夜まで起きていました。

彼女達と話していて最も驚いたのは、韓国の教育制度です。それぞれいろいろな学校から来ているのにも関わらず、口を揃えて、学校が終わるのは十一時か十二時くらいで、朝勉強の時間がある日もあるのよ。といっているのを聞き、それが午後の十一時のことを指していることを知った時は、本当に耳を疑いました。日本では三時くらいに授業が終わることを伝えるとものすごく羨ましそうな目で、いいなあと言っていたのを今でも覚えています。

ジェンダー問題について話していると、学校の授業で「もし中国人と結婚したら家事をしなくてもよい、韓国人と結婚したら家事は半分で良い、日本人と結婚したら全部しなくてはならない」と先生が言っていたと教えてくれました。そのとき丁度話題に上がっていたマタニティーハラスメントの説明をすると、「なぜ」「どうして」とまるで自分たちが当事者かのように怒る彼女達を見て、意識の高さに感心しました。

サミットの期間中、ある男の子に、慰安婦問題について日本の高校生は知っているのか、学校ではどう教えられるのか、と聞かれました。私が知っている

と答えると大変驚いた様子で、政府が謝らないということはつまり日本人全員が、内容はもちろんの事、そういうことが起きたという事実さえも教えられる事なく、知らないのだと彼は考えていたようです。

また、領土問題の話になった時、韓国ではセンター試験に相当するような大きなテストで、なぜトクト、つまり竹島の事ですが、が韓国領であるかを問う問題が出た事があると聞きました。そしてさらに、数秒前までへらへらしていた男の子が、私の目を見てはっきり「トクトは韓国人の片腕のようなもん。なくなったら困るし、なくしては生きて行けない。利益不利益なしにして、それは、僕たちの象徴なんだ。」と言いました。きっとこれはあくまで彼の意見で、韓国人全てがそう思っている訳ではないでしょうが、私は言葉を失いました。同じ年頃の日本人で、こんなことを言う人には会った事がありません。私が図書館で借りた、どの本にも書いていない実際の声を私は聞いたのだと思いました。私が知る限り、日本ではそのようなテスト問題が出された事もなければ、授業でも深く学ぶ事もありません。いつかの授業で、日本が抱える領土問題と題して歴史背景とともに先生が説明していたのを覚えていますが、恵泉の授業ではそれが日本のものであることを強調する言葉はなかったように思います。

サミットの期間中、私は常に日本人としての自分の意見を問われました。今回の経験を通して、日頃、日中韓に関するニュースを聞く時、他人事とせず自分のこととして考えること、ニュースに関して、自分の意見を持つことなどの重要性に気づかされました。それは日本にいても日頃からできる事ではないでしょうか。

日中韓が協力する未来は訪れるのか、誰にも分かりません。しかし、今回のサミットを通して感じた事があります。それは若い人の力です。大人は、高校生が話し合ったって無駄だと言うかもしれません。しかしながら、偏見や地位を持たずに一人の人間として一生懸命分かり合おうとする高校生達を見て、私たちが大人になったら今とは違う状況があるのではないかと感じずにはいられませんでした。日中韓の高校生が集まって三カ国の未来について話し合うというアイディアは私たちと同じ高校生から生まれたそうです。韓国の高校生は、政府や組織からの協力を受けるため、多くの苦労を重ね、それを実現させました。お互いの誤解や、歴史認識を全て解決するのは無理かもしれませんが、若い世代の柔軟な発想や行動力を使って関係を改善することは可能だと思います。「最近の若者はだめだ」そんな言葉を今まで何度も何度も聞きましたが、私た

ちにだって、昔の若者に勝る能力があります。それは、直感力と発信力です。大人達が頑張って説明書を読んで操作する機械も、私たちは適当に操作すればだいたい操作できます。順序や方法にこだわらず、新しい物を創造できる能力を私たちは持っています。そしてＳＮＳを使いこなして効果的に意見を発信する事も簡単にできます。

私は、幸運な事にこのような素晴らしい機会を得る事ができました。けれども、挑戦に規模は関係ありませんし、どんな小さな事でも新しい事に挑戦していく事は、自分の人生を豊かにする材料となることには違いありません。スポーツでも勉強でも、分野に限らず、最終的に打ち勝たねばならぬものは自分自身です。二〇一五年は、このことを肝に銘じて、自分の将来のためにも、多くの事を収穫できる一年にしたいです。